

# 私にも 言わせて! 第131回

## すべての子どもたちの健やかな毎日 夢ある未来のために今、ここから



倉吉保健所長 兼  
鳥取県子ども家庭部参事監 兼  
鳥取療育園医長  
**小倉 加恵子**

平成9年鳥取大学医学部卒業後、同大学脳神経小児科入局。東北大学大学院博士課程修了。医療機関勤務、国立障害者リハビリテーションセンター小児科医長・発達障害研究室長、国立成育医療研究センターこころの診療科診療部長を経て、令和2年鳥取県入職。小児神経科専門医、リハビリテーション科専門医、医師会認定産業医。

国立保健医療科学院の研修同期が寄稿したことをきっかけに、このシリーズを知りました。諸先輩方の人生行路の多様さと公衆衛生に対する思いのあふれる内容で、今では人間味あふれるこの物語集の愛読者となりました。その一ページに私も加えていただけることに感謝し、これまでを振り返りながら筆を執らせていただきます。

### 最初の一步

大学卒業後の進路選択は、診療するなら子どもの笑顔が見られる場所がよい、子どもの成長・発達を支える脳の仕組みを学びたいという二つの願望から、卒業大学にある小児神経の専門診療科に入局しました。大学附属病院は望みになう場所でも上司にも恵まれました。想定外だったのは、診療対象となる小児神経疾患の多くが希少難病だったことです。回復した子どもを病院から送り出せる喜びはあれどもその機会は少なく、難治性疾患に<sup>対峙</sup>する困難や挫折感、長期入院となることも・家族のケアの在り方

わるつもりだったので予定にはない道でしたが、多分野の関係機関と協力しながら新しい仕組みをつくっていく面白みのある仕事でした。

同センターの研究部門に異動してしばらくたった頃、元上司の推薦で厚生労働省母子保健課に人事交流として出向しました。難病法の成立を目指していた時期で、私は子どもの難病(小児慢性特定疾病)を扱う児童福祉法の改正に携わりました。また、「健康日本21」のことも版「健やか親子21」の第2次計画を策定する時期でもあり、第1次の取りまとめと第2次の立案において一端を担わせていただきました。行政畑の同僚と共に医系技官としての国の仕組みづくりに携わることはやりがいのある貴重な経験でした。一方で、これまでに得た専門性が生かせず、現場を離れて患者の声を聴けない状態が続くことに不安と葛藤を覚えるようになりました。

### 放浪記(3) 再び小児神経の臨床へ

ちょうどその頃、学会でお世話になっていた先輩から脳性麻痺の高次脳機能の診療をしないかとお声掛けいただき、携わっていた改正法が

への問いなど、胸中には常に葛藤がありました。また、脳損傷により子どもが失った機能と残された機能を正確に把握できない自分の未熟さに不満がありました。

当時の医局は病院診療のほかに、山陰2県の県型保健所が運営する「発達クリニック」(乳幼児健診の2次健診)に診療医を派遣しており、私は鳥根県奥出雲の雲南地区と離島の隠岐地区を担当しました。月に1回程度ですが、保健師と地域を回り、保育所・学校担任の方々と共に子どもの特性に応じた環境づくりに取り組んだり、地域で勉強会を開いたり、暮らしを肌で感じる現場でした。今思えばこの頃す

成立して一段落したタイミングで大阪の病院に異動しました。民間医療機関でしたが、脳性麻痺診療をフラッグシップとして地域での病院の価値付けを目指す取り組みをしていました。プロジェクトメンバーとして、また臨床医として充実した日々となりました。同時期から、厚生労働科の分担研究の機会を得て、母子保健領域の研究を開始、個人でも科研やAMEDの助成を得て専門領域の研究に励みました。

この頃に診療を通じて痛感したのは、疾病や障害の重症度が予後のすべてではないということでした。子どもの置かれる環境、関わる人たちによつて日々の生活が変わり、子どもの状態も大きく変わります。私に何ができるだろうかともんもんとしていた折、国立成育医療研究センターに診療部長のポストを得て、職場を世田谷区に移しました。診療対象の多くは健康に生まれ育ち、かつ経済的にも恵まれた家庭の子どもたちでした。にもかかわらず、学校や家族関係の問題を契機に心を病み、自分を傷つけたり不登校になったりしていました。環境が病気になる、その下流にどっぷりつきながら、上流での対策の必要

でに公衆衛生領域に心が向きかけていたのですが、公衆衛生医師という選択肢を知りませんでした。

### 放浪記(1) 仙台でヒトの心の深淵を科学する

入局後8年目に、東北大学高次脳機能障害リハビリテーション科に医師として勉強に参りました。当時はこの領域を専門的に扱う医療機関は少なく小児への応用も不十分だったことから、まずは身をもって学ぼうと、神経内科や精神科の医師たちの中に飛び込むことにしました。私のような変わり種にも鷹揚な医局で、快く受け入れてくださいました。カンファレンスではマニアックな熱い議論が交わされ、医局の大学院生はコメディカルが多いこともあり、幅広い視点で新しい分野を学べて、日々とても刺激的でした。1年の滞在予定でしたが探求心が収まらず同大学大学院に入学、臨床に併せて画像解析などの研究

性を切に感じていました。そんなさなか、家族の事情により急ぎよ、鳥取県に移り住むことになりました。

### そして、公衆衛生医師に

鳥取県に戻り、自分の抱えた問題意識に従って公衆衛生医師として県に入職することにしました。母子保健を担当し、月に2回療育園で診療、厚生科研などの研究活動は継続してよいと希望通りに処遇していただきました。

しかしその期間は短く、翌年には保健所に異動となりCOVID-19と闘うことになりました。感染者数の少なかつた鳥取県ですが、第4波から感染が拡大し、第5波では担当者の超過勤務が200時間を超える月が続きました。災害級と判断して組織を改編、総合事務所の人員を含めた全所体制を整備し、勤務体制に3勤1休の交代制を導入しました。しかし、COVID-19の収束は見えず、対応に明け暮れる日々が続く中で現職の意義も目的も見失いそうになっていました。

そんな令和4年春、県の指示で国立保健医療科学院の研修に参加しました。正直なところ本意では

にも携わらせていただきました。脳損傷により言葉を失うなど障害を抱えながらも楽しく生活される方、認知機能はほぼ保たれていても喪失した機能に固執してうっ屈する方、発症前より絆が強まる家庭もあれば破綻する家庭もあり。臨床を通じてさまざまな方々の人生に寄り添いながら、傷ついた脳を通じて見えてくる人間性や人間模様、ヒトの幸せの所在、科学でどこまで分かるのか、医療は何ができるのかいろいろと考え、あさるように文献を読んだ時期でした。

### 放浪記(2) 行政分野に片足を入れる

博士課程を修了するタイミングで、国立障害者リハビリテーションセンター発達障害情報・支援センターに推薦いただき着任しました。厚生労働省から移設された部署で、事務局は本庁にあり、支援施策の全国展開に関わりました。臨床に携

なかつたのですが、卓越した講師陣から幅広く深い公衆衛生に関する学びを得られ、志が温め直されました。そして何より、一緒に同じ方向を見る同期の仲間に出会えたことが心の支えになりました。今年度から保健所長となり、何かと悩みは尽きませんが、兼務に十分な時間が割けない葛藤もあります。日本のあちこちで同期が励んでいると思うことが私を鼓舞してくれています。

### おわりに

タイトルは、私が講演などで使うスライドの最後の一枚に書いている言葉です。私の放浪記が始まった頃からずっと同じ一枚を使っています。その時々にならっている場所から、そして人生の節目に、繰り返し投げ掛けている言葉です。大切にしている自分軸であり、自分と社会に対する問いであり、祈りでもあります。私の道程はこれからどこにつながるのか分かりません。ただ、これまで出会ったすべての方々への感謝とこれまで通りの信条を胸に、変わらぬ精進を誓います。最後に、どんなときも私を理解し応援してくれる夫への感謝を記して筆をおきます。